

## 長田幹彦 『霧』 論

浅井航洋

—

長田幹彦といえは、『溼』（『スバル』明治四四・一一〜四五・三）『零落』（『中央公論』明治四五・四）で鮮烈なデビューを飾り、当初は谷崎潤一郎とともに有望な若手作家として併称されていたが、大正五年の遊蕩文学撲滅論争において赤木桁平により糾弾され、通俗小説家に転身したというのが文学史における一般的な評価であろう。この通俗小説家への転身は〈墮落〉<sup>①</sup>として否定的に評価されるのが常であった。そこには芸術という価値基準に基づき、純文学を高く見る一方で通俗小説を低く見る文学主義が潜んでいることは言うまでもない。しかしこうした見方は、幹彦が通俗小説家として成功した事実を無視している。この点について山本芳明は次のように述べる。

こうしてたどってみればわかるように、江馬修や島田清次郎に匹敵し得るベストセラー通俗小説の書き手は、久米正雄や菊池寛ではなく、幹彦だったのである。現在、彼の文学史的立場が見失われているのは、売れるが故に、同時代の文壇から「墮落」した作家として厳しく批判され、その結果、彼の存在自体が無視されるようになったためだと考えられる。／しかし、大正期の文学の特質を考えるためには、同時代の読者に熱烈に愛好された幹彦の作品を無視することができないばかりでなく、むしろ、どう組み込むのかを考察することが重要な課題となる。<sup>(2)</sup>

こうした指摘がありながら、現在に至るまで幹彦の研究はほとんど進展していない。他にも高木健夫は『新聞小説史』大正篇（一九七六・一一 国書刊行会）で『霧』を始めとする幹彦の新聞小説を挙げて、その新聞小説家としての側面を指摘しているが、作品内容には踏み込んでいない。また、近年、藤井淑禎が同様に幹彦の再評価を提起している。

長田幹彦といえは文学史的には大正初期の祇園での遊興に取材したいわゆる情話物が有名で、それが赤木桁平の「遊蕩文学」の撲滅（『読売新聞』大五・八・六）に批判されてからは通俗小説への転向を余儀なくされたことになっているが、これは代々引き継がれてきた文学史のあやまりで、それ以前に「霧」のような優れた通俗小説もあれば（後述「藤井は後の箇所『霧』の梗概について説明している」）、赤木による批判以降も『新小説』や『中央公論』といった純文芸誌への執筆は続いているのである。<sup>(3)</sup>

本稿ではこれらの指摘を踏まえ、幹彦の通俗小説家としての側面に注目し、その作品を検討していきたい。通俗小説家としての幹彦に注目する理由は二つある。一つ目は、遊蕩文学撲滅論争以降、通俗小説家に転身した幹彦の作家

活動が作品に即して跡づけられていないことである。文学史的には「墮落」とされる一方で、人気を博していた幹彦の通俗小説作品とはどのようなものだったのか、具体的な検討が必要であろう。二つ目は明治期家庭小説と大正期通俗小説との接続の問題を考えたとき、幹彦が両者の中間に位置することである。すなわち、菊池幽芳などに代表される明治期家庭小説と、菊池寛・久米正雄に代表される大正期通俗小説における共通性と差異はどのように説明できるのか。この問題において、両者の中間に位置する幹彦の作品を検討することは、より精緻に通俗小説の歴史を記述することにつながる。特に、大正期通俗小説は菊池寛・久米正雄を起点にして語られることが文学史的通説になっているが、こうした見方は正しいのか。この点について山本芳明は幹彦と徳田秋声を〈人間〉を描くことに重点を置いたものとして、菊池・久米の通俗小説との差異を指摘している。

しかし、秋声らの、〈人間〉を描くことに重点を置く通俗小説論は文学史的に軽視されてきた。「中略。久米『螢草』や菊池『真珠夫人』に代表される」プロットやストーリーを重視した通俗小説が、いわば世代交代をするように「勢力」を得たとされてきたからだ。「中略」だが、大正後期において、『真珠夫人』型の通俗小説がヘゲモニーを握ったとするのは、いささか過大評価であろう。秋声―幹彦のラインも依然として根強い「勢力」を保っていたからである。<sup>(4)</sup>

ただしこうした山本の問題提起も、作品を通じて検討される必要があるだろう。それは長田幹彦という作家のアウトラインを描くだけでなく、通俗小説史の見直しを迫ることにつながると言えよう。さらに、通俗小説に対する考察は、通俗小説が〈芸術／非芸術〉という分節を前提にして成立するジャンルである以上、近代文学史における純文学Ⅱ芸

術とは何か、またどのようにそれらが形成されていったのかという問いにつながる射程を持つと考えられる。

如上の問題意識の下、本稿では長田幹彦『霧』について検討する。この作品は幹彦の最初の新聞連載小説・長篇小説であり、幹彦が後に通俗小説へと転じていくことを考える上で重要な作品と考えられる。

## 二

『霧』は大正二年一月一日から翌年四月十九日にかけて『東京朝日新聞』にて連載された。直前まで連載されていたのは夏目漱石『行人』（大正元・一二・六〜大正二・四・七、同九・一八〜一一・一五）で、『霧』の後に連載されたのは同じく漱石の『こゝろ』（大正三・四・二〇〜八・一一）である。連載終了後、大正三年五月一七日に九十九書房より単行本が出版された。初出では「一の一」から「一九の七」まで合計一三五回が掲載され、全一九章に分けられている。九十九書房の単行本では章番号が削除され、代わりに一章から「砂丘」「良人の家」「劇場の夜」「わが子」「冷たき影」「母の心」「病める生命」「なりゆき」「露頭」「車中の人」「暮れゆく海」「霧」「月光」「自殺」「母の家」「師走の町」「旅路」「吹雪の夜」「馬櫓の鈴音」という章題が付けられている。この単行本について、大正三年五月二二日『読売新聞』の広告では「▲東京朝日に連載して大好評を博し／▲発行数を倍加せる傑作長篇小説！」と記載されている。『東京朝日新聞』の「発行数を倍加せる」は誇張であろうが、「大好評忽再版」とあることから、単行本の売れ行きはよかったようだ。また大正四年一二月に春陽堂から出版された『露ぐさ』に収められている。

次に『霧』の梗概について述べる。

手術を受け、大洗で術後の療養していた津崎俊子は夫の時之助から治療の金銭的負担を理由に離婚を切り出される。俊子は東京に戻り、離婚問題にどう対応するか母親と相談しながら思案する。しかし夫には他に愛人がおり、夫から

自分への愛が冷めているのを俊子は感じていた。俊子は幼なじみの杉浦毅との手紙がきっかけで、毅と姦通しているのではないかという疑いをかけられる。時之助は姦通の告訴をすると二人を脅迫し、金銭を要求する。そんな折、俊子が病気で伏せている間に、時之助が文書偽造と横領で逮捕されてしまう。病気から回復した俊子は毅への恋心を自覚し、毅も俊子の想いを受け入れ、二人は逢瀬を楽しむ。その後、釈放された時之助が俊子に詫び、関係を修復したいと申し出る。俊子が拒否すると、まだ法律上では夫婦関係が継続していることから、二人を姦通罪で告訴すると脅す。俊子の実家では、津崎と毅の双方から俊子を引き離すために、従姉妹の治子が住む北海道へ俊子を送る計画が持ち上がる。しかし俊子は北海道へ渡った後、俊子のあとを追ってきた毅と二人で駆け落ちする。北海道で逃避行を続けるが、二人を捜索していた巡査に見つかってしまう。毅は隠し持っていた銃で俊子と自分を撃ち、心中する。

本作の執筆の経緯や評判について、幹彦は『青春時代』（昭和二七・一一 出版東京）で述べている。

京都に半年いて東京へ帰つてくると「東京朝日」から神崎営業局長がきて、新聞小説を書けという。何分にも初めてのことなので一向自信がなかつたが、とにかく金になりそうなので、よろこんで引受けた。それが「霧」という僕の最初の続き物である。これが幸い非常に受けて、五十回を超えると殆ど毎日二通乃至五通ぐらいつつ読者から激励の手紙が来る。それが大がい女性で一種のラブレターであつた。中には人妻らしいのもずいぶんあつた。人妻と純情青年との恋愛を書いた作品だつたからだらう。

幹彦が京都へ行ったのは明治四五年のことである。幹彦に依頼された経緯は未詳だが、『滯』『零落』が好評で有望な新進作家とみなされていたので、そうした評判を当て込んだのではないか。また「殆ど毎日二通乃至五通ぐらいつ

つ読者から激励の手紙が来て」しかも「それが大がい女性」というから、女性読者からの人気が高かったことがうかがわれる。『霧』の人気について幹彦は「霧」は私の数多い長篇小説の中の処女作であった。幸ひにしてあの作は大の好評を博し、読者諸賢から種種の讃詞を寄せられたが、その当時の感激は今も猶私の胸裡に最も楽しい追憶のひとつとなつて残つてゐる。」<sup>(6)</sup>というように、後年になつても言及するなど、印象深い作品だったといえよう。加藤武雄も「通俗小説家として、古くから活躍してゐる人」に長田幹彦の名を挙げ、『霧』は「最も世評を博した」と述べている。<sup>(7)</sup> 幹彦にとって最初の新聞連載小説であつた本作の成功は、幹彦が後に通俗小説家へと転身していきつかけを作つたと位置づけられよう。

次に同時代評について見ていきたい。徳田秋声は次のように述べる。

長田幹彦氏の「霧」は、読者受けと云ふ事を主眼に置いて書いた、通俗小説とのことであるから、厳密な意味で純芸術品といふ事が出来ぬかも知れないが、如何にもふつくらした筆致で、のんびりと描かれて居る所に、私は少からず興味を持った。それと同時に私は、此作者が年の割には実に好く細かいところまで眼の届く人だと云ふことを知つて、實際驚いた。<sup>(8)</sup>

秋声は「読者受けと云ふ事を主眼に置いて書いた、通俗小説とのことである」と、『霧』が通俗小説であることについて、伝え聞いたかのような書き方をしている。紙上には通俗小説とは記載されていないから、秋声の判断ではなく何かしらの噂を耳にしたのではないか（幹彦と秋声の間には接点が見えないので、直接聞いた可能性は低いと考える）。初めての新聞連載小説ということを考えれば、幹彦が意図的に書き方を通俗小説寄りに変えた可能性をうかがわせる。



本作が通俗的であるという指摘は別の評にも見える。

かつて「東京朝日」に■載して好評を博したる長篇小説である通俗小説なるが如くして而もその中心芸術の境を失はず、さればとて固苦しき純芸術品にあらざれば読者にとつてこの上もなく興味深き読物にして、汲めども汲めども津々として尽きざる快感は泉の如く湛えられたり、而も■彩なる著者の筆は一味の香気を帯びて薫しく、あだかも花園に逍遙するの観あり。なほヒロインの俊子の複雑なる心理は描破して精密細微に入りて余す所なし。近来に得たる好読物たるを失はざる事を信ず<sup>9</sup>

『霧』が芸術性と通俗性を併せ持っているという。具体的にどういう要素を芸術的／通俗的とみなしているのか不明瞭だが、秋声は「如何にもふつくらした筆致で、のんびりと描かれて居る」と述べ、「新刊批評」では「著者の筆は一味の香気を帯びて薫しく、あだかも花園に逍遙するの観あり」と幹彦の文章を高く評価する点で共通している。こうした指摘は『霧』に限ったことではない。『霧』以外の幹彦作品に関する同時代評を通覧していくと、内容面には厳しい評価が多いのだが、文章についてはある程度評価されていた。例えば無署名「前月文壇史」(『新潮』大正二・七)では『解剖室』(『文章世界』大正二・六)と『師匠の娘』(『新小説』大正二・六)について「浅薄なもの」「才筆に任して只ベラ／＼と書きなぐつたと云ふやうなもの」と否定的に評価しながら、「しかし先づ取柄を云へば、文章がうまいから、其の見た俣、感じた俣の情景を巧みに描出して見せる」と文章力を認めている。このように幹彦は同時代的に見ても高い文章力を持った作家だったといえよう。

『読売新聞』大正一三年九月六日の単行本『霧』（春陽堂）の広告には「某家庭に起つた事実を根とし、婦人の貞操問題と恋愛の自由とに関して、作者が熱に筆をとつた傑作」と記載されていた。この広告文は二つの点で興味深い。一つ目は「某家庭に起つた事実を根とし」という素材の存在を示唆している点である。二つ目は「婦人の貞操問題と恋愛の自由」というテーマを指摘している点である。テーマについては後述するので、まず素材の問題について検討したい。

本作にモデルとなるような事件が存在したのかについて、作品発表時において上流階級の子女が不倫・心中するといった本作と重なる事件は見つけられなかった。

しかし幹彦の周辺では、本作発表の前年の明治四五年に北原白秋が姦通事件に巻き込まれていた。白秋は明治四三年九月に国民新聞社に勤めていた松下長平とその妻俊子の隣に引っ越したことが縁で、俊子と相知るようになった。白秋は明治四五年七月五日に松下長平から姦通罪で告訴され、翌日市ヶ谷の未決監に拘留される。<sup>10</sup>

この白秋の姦通事件と『霧』には共通点が見られる。まずは名前の一致である。『霧』の主人公の俊子と、白秋の手である松下俊子は名前が一致している。また『霧』の俊子の旧姓は松倉であり、松下俊子の姓と類似している。松下長平は俊子のほかに愛人を作っており、その愛人を家に引き入れようとしていたという。「女を虐待して、離縁をせうとするけれど、口実が無い、それで僕と怪しいといふ事をして一騒ぎ持ち上つた」（大正二・六・一七 山本鼎宛白秋書簡<sup>11</sup>）、「初め彼女の夫は他の女を自宅に引入れたに就て、彼女を離縁せんとしたが、その口実を僕になすりつけたので、確かにそれまでは僕と彼女の關係に怪しい事はない」（大正二・八・一九 馬場静浪宛白秋書簡）というように、



白秋の言い分を信じるのであれば、松下夫婦は夫婦関係が破綻していたところに白秋との関係が口実として利用されたという。この構図は『霧』において津崎が俊子を離縁しようとした際、毅からの書簡を発見してそれを口実に姦通罪で告訴する構えを見せたのと類似している。

また姦通での起訴後は白秋の弟・鉄雄が奔走して、三〇〇円の示談金によって松下長平と示談し、告訴を取り下げてもらったことで白秋は釈放された。

俊子の夫松下に対して行われていた告訴取下げの交渉は、なかなか埒があかなかった。そこで国民新聞の俳壇の選者をしている篠原温亭に調停を依頼した。篠原の口利きで示談のめどはついたものの、先方の要求は一にも二にも金であった。それも三百円という法外の金額であった。

〔中略〕

浜町の「山月」という待合は俊子の叔父にあたる人の経営であった。そこに両者が会合して、金三百円と引換えに告訴状取下げの書類に調印させた。この調印と同時に松下は俊子を正式に離婚したのだが、金さえ取れば用はないと破顔大笑して出ていくうしろ姿に鉄雄は切齒扼腕した。<sup>12</sup>

告訴前の脅迫と告訴後の示談という違いはあるものの、姦通を材料に金銭を要求している点では『霧』の津崎と重なっている。このように俊子の名前や、夫が愛人を作り夫婦関係が破綻していること、姦通を材料として金銭を要求していることなどが『霧』のあらすじと重なる。

白秋の事件について幹彦がどの程度知っていたかが問題になるが、白秋と幹彦の関係は、『明星』時代に遡り、『明

『星』連袂脱退事件や『スバル』パンの会などで行動を共にし、白秋が主宰していた『朱鸞』、『屋上庭園』などの雑誌に幹彦は寄稿していた。直接親しかったというよりは兄の秀雄を介した関係ではあったようだが、近い位置にいたのは確かであり、新聞報道以上の情報を入手できる環境にあった。

ただしこれは偶然の一致かもしれない。名前の一致を除けば、人妻との不倫や姦通罪での告訴を使った脅迫などは、白秋の事件がなくても思いつく範囲であろう。また、大正三年に幹彦の兄の長田秀雄が、白秋と俊子の事件をモデルにして創作しようとしたことがあった。秀雄は白秋と俊子を擁護する立場から創作する旨を白秋に伝えたいのだが、白秋は「事件が生新らしいだけ、ふり返つて見るだけでも血がしたたる」「この生創（俊子との事件を指す）に触らないで、放つて置いて貰ひたい、その方がどれだけうれしいかわからない」と抗議の意を述べている（大正三・三・二〇 長田秀雄宛白秋書簡）。この書簡において、幹彦の『霧』が連載中であるにもかかわらず全く触れられていないことから、白秋は『霧』を全く読んでいなかったか、あるいは自分たちの関係がモデルだとは思っていないかったのかもしれない。

次に別の素材の可能性について検討したい。手がかりとなるのは田山花袋の『霧』評である。

新聞に出てゐる小説では、長田君の『霧』は始めから読んで見ました。自己の経験から得て来たらしい好いところろが沢山にありましたが、それがある仮面をかぶつたがために、半分以上その真摯なところを失つて了つてゐるのを見ました。<sup>(13)</sup>

「自己の経験から得て来たらしい好いところ」というように、花袋は本作に素材となる経験が存在したことを示唆し

ている。これは本作の執筆の直前に、幹彦自身も人妻と関係を持っていたことを指しているのではないか。

幹彦は大正元年初冬から大正二年一月にかけて、井口はる子という女性と関係を持った。この井口はる子は箏曲家の鈴木鼓村の弟子であり、鈴木鼓村と与謝野鉄幹・晶子夫妻とが昵懇の仲であったことから知り合ったという。その鈴木はる子が東京に帰った幹彦のところへ訪ねてきた。

だんだん話を聞いてみると、娘と思いのほか、もう彼女は半年ほど前に結婚して、主人が病身であるため、どうも家庭生活が面白くないかないなぞとこましやくれたことをいう。宿酔で、おびただしくセンチメンタルになっている時に、そんな話は禁物である。どうも僕は第一印象からして身の危険を感じた。「中略」九段を上つて、初冬の肌寒い風に吹かれながら、例の靖国神社の桜の下を歩いているうちに、とうとう僕は勘弁が出来なくなつて手をだしてしまった。その時に何だか変に口が臭いなど思つたが、まさか彼女の娘々した豊艶な肉体が恐るべきスピロヘーテ・バリーダ「梅毒のこと」の巣窟であろうとは、神ならぬ身の知る由もなかつた。<sup>14</sup>

はる子が梅毒にかかっていたというが、これは『霧』の俊子の人物設定に近い。『霧』は俊子が手術をしてその術後に大洗で療養しているところから物語が始まるのだが、この俊子の手術に至った原因は夫である津崎時之助から性病をうつされたことであると遠回しに述べられている。夫は「大分悪い遊びをする」、結婚前には「随分乱暴をやつたらしい」（一の三）という放蕩者で、「良人が悪性の病を受けてこつそり病院通ひをしてゐる」や「今度の大病（物語冒頭で俊子が療養する原因となつた病気を指す）も原因は良人にあることを医師の口から薄々聞き知つた」（一の四）というように夫からの性病が感染したせいであることが仄めかされている。

こうした幹彦と井口はる子の関係はすぐに夫に露見してしまった。

〔井口はる子と〕小田原の宿屋に三日いて、虎の尻ツぽを踏むような恐ろしい思いをしながら東京へ帰ってくる。東京ではまさにひつくり返るやうな大騒動である。そのはる子の主人というのが、僕の親父の家へ押掛けて来てピストルなんぞひけらかしたというのである。／大がいな事には驚かない僕も、姦通という恐ろしい事犯にひつかかっているのを感じしているだけに、今度ばかりはシャツポをぬがざるを得なかつた。それに北原白秋君が前年やはり姦通でひつかかつて未決へ放り込まれているので、もう今度こそはいよいよ年貢の収め時だと思つた。<sup>(15)</sup>

このあと、幹彦が借金の整理をして捕まる覚悟を決めたところに田山花袋から電話がかかってくる。反自然主義の幹彦と自然主義の田山花袋という取り合わせはいささか奇妙に見えるが、幹彦は「僕は、先生〔花袋を指す〕の作品としては、「土手の家」以外のものはあまり好まなかつたが、先生の人間にはまったく打込んでいた。立派な人だつたと思う<sup>(16)</sup>」と述べており、実生活では親しくしていたようだ。また幹彦は花袋の弟子の白石実三と早稲田大学で共に学んだ昵懇の仲であり、幹彦の人間関係は必ずしも『明星』や『スバル』などの反自然主義方面に限定されていたわけではない。

花袋に会った幹彦は「実は僕二三日うちに未決へぶち込まれると思うんですけど」「悪いことをしたんです。人の女房と姦通したんです」と告白する。幹彦は捕まることを覚悟していたらしいが、花袋と話しているうちに気が変わって、翌日井口はる子の夫と直接会って話してみると、この夫は幹彦のファンで「これを御縁に、僕と兄弟づきあいをして下さいませんか」と「あつけなくファイナレになつてしまつた<sup>(17)</sup>」という。

この顛末といい、幹彦の回想は誇張めいたところがあるので細部に関して信用できないが、<sup>(18)</sup> 幹彦自身が人妻と関係を持ったこと、またその相手が性病にかかっていたことは『霧』と一致する。また花袋にそのことを話したからこそ、花袋の『霧』評が創作背景を知っているかのような書き方になっていることも納得がいく。

ここまで本作の素材について検討してきた。素材として白秋と幹彦二人の姦通を挙げたが、いずれも作品とびつたり一致するわけではなかった。幹彦はこうした自己や周囲の経験から、着想を得たのではないかと思われるが、作品全体の筋道を決定するほど素材に寄りかかっていたわけではない。こうした幹彦の、自己の経験やモデルを最重要視しない方法は、通俗小説家として成功することに寄与したのではないだろうか。自然主義文学は文学上に〈真〉を實現するために事実を用いることを重要視した。花袋の前掲『霧』評の「それ〔自己の経験を指す〕がある仮面をかぶつたがために、半分以上その真摯なところを失つて了つてゐる」という指摘は事実から離れている点をネガティブに評価していた。しかしそれは花袋から見たら欠点であっても、幹彦にとってはむしろそうした自己の経験を着想程度にとどめ、空想によって物語を紡いでいく方法こそが多くの通俗小説を手がける上で結果的に有効だったと考えられるのである。

#### 四

ここまで作品の周辺や成立について検討してきた。ここからは本文の分析を行っていききたい。『霧』は俊子が転地療養していた大洗（茨城県）の海岸から物語が始まる。

ゆうべから暁方まで夜ひと夜暴れ狂つてゐた暴風の余勢もいつの間にか吹き落ちて、灰色に濁つた大空には漸次

と迫つてくる黄昏と、もに何とも名状することの出来ぬ不安な静けさが一面に漂よつて来た。海は見渡す限り蒼あおと、  
黝くろく澱んで、沖の方で巻き返してゐる波浪だけが真白な鬣たてがみを振り乱す群馬の列のやうに彼方此方で音もなく奔騰してゐる。遠く河口の方まで展がった荒寥とした砂原にはいつに交らぬ奇怪な姿をした砂丘すなやまの群が縦横に起伏して、ゆうべの風で吹き平らげられたその灰色の面には漣のやうな小さな皺が数限りもなく描き出されてゐる。その間には人間の歩み過ぎた気勢けはひもなく僅かに海鳥の足痕が異様な曲線を描きながら点々と続いてゐるばかりである。

(一の一)

この自然描写は、『霧』以前に発表され、同じ大洗を舞台とした『砂丘』(『新小説』大正元・一〇)のものを使い回している。『砂丘』の自然描写を次に掲げる。

暴風は既に吹き去つて、灰色に濁つた大空には何とも云へない不安な沈黙が重苦しく漂つてゐた。海は黒く澱んで、沖の方で碎ける波浪はまるで煮沸してゐるやうに音もなく奔騰してゐる。寂しい砂丘の群は死んだやうな限りない寂寥に掩はれ、ゆうべの風で吹き平らげられたのか遠く展がった灰色の面には、漣のやうな皺が一面に描き出されて、その間には僅かに小さな海鳥の足痕が点々と続いてゐるばかりであつた。

両者を比較してみると「暴風」、「灰色に濁つた大空」の「不安な静けさ」、黒く澱んだ海の「奔騰」、そこから砂丘へと転じて「漣のやうな小さな皺」、「海鳥の足痕」とほとんど同一の運びになっている。『砂丘』の方では引用部に続いて、語り手の「私」は「海鳥の足痕」から「薄気味の悪い戦慄」「或深い深い暗示」「人の知らない不可思議な力が



いかにも神秘に描き出されてゐるやうな激しい恐怖と悲しみ」を感じる。こうした暗さが強調される構図は『霧』でも同様である。俊子は海岸を散歩しながら「砂漠のやうに荒<sup>すさ</sup>び果てた一家の有様や、自分の身の行末などをいろいろに思ひ廻ら」し、「砂丘の姿が彼女にはどうしても自分の寂しい運命を暗示してゐるやうに思はれてならなかつた」（一）と自分の「寂寞、孤独」の心情を重ね合わせているからである。「砂漠のやうに荒び果てた一家の有様」とは夫から俊子への愛情が消滅し、治療費を理由に離婚をほめかかされている現状を指し示し、「寂寞、孤独」の心情もそうした家庭状況に起因している。こうした暗い描写で物語が始まることで、『霧』の作品世界の基調を読者に示していると言えるだろう。

しかし一方で、この療養先での俊子の散歩は「自分を取囲むすべて〔の〕人々から離れて、唯独りで自由にものを思ふことの出来るのは事実その短かい時間の間だけであつた」（二の一）というように、俊子が夫や家族や〈家〉から離れて〈個人〉として自己を見つめる時間になっていることは注目されてよい。同様のことは、俊子が毅と姦通の疑いをかけられ、肺炎にかかり、その回復後に療養のため沼津の別荘へ行った際にも言える。沼津に行く途中の列車内で俊子は毅への恋愛感情を強く自覚し、沼津では毅に恋文を送って逢瀬を楽しむようになるのだが、こうした積極的な行動も、家族や〈家〉といったしがらみのある東京を離れた地方において可能になっているのである。逆に言えば東京は家族によって監視される不自由な空間として描かれる。

このような〈個人〉としての自覚は、本作の重要な要素となっている。俊子は毅との関係を母親から疑われた際に、次のように妻たる自分が夫と対等な個人として扱われるべきことを述べる。

私は津崎の妻にはなりませんでしたけど、心まであの人につきかり遣つてしまつた訳では御座いません。私にだつて自

由は御座います。心のなかで何んな事を考へてゐたつて、あの人がそれを干渉する権利は御座いません。若しそれが厭なら何故私の心まで自分のものにするやうな手段を執らないで御座いませう。私共は繊弱かよわい女で御座いますから、良人が私共に対して尽くして呉れることを尽くしてくれさへすれば、いつでも良人のものになります。それに良人はまるで私を女中かなんぞのやうに思つてゐて、ちつとも私の事なんか考へて呉れないんです。それですから私だつて反抗しずにはゐられません。私もかうなつた上はもう何処までも争ひます。自分の心が良人に分るまでは何んな事があつても動きません。

(六の五)

こうした夫に服従する妻にとどまらない俊子の主張を同時代状況に照らしてみると、本作が発表された大正二年は〈新しい女〉などの婦人問題が世間を賑わしていた時期だったことは重要である。明治四四年に『青鞥』の発刊や文芸協会によるイプセン『人形の家』の上演が行われたことをきっかけに、大正二年には『太陽』大正二・六増刊号「近時之婦人問題」や『中央公論』大正二・七増刊号「婦人問題号」といった特集号が発行された。このとき議論された婦人問題とは一口に言つてしまえば女性の地位に関する議論だが、具体的なレベルでは複数の論点を含んでおり、多くの人が論じたという点で、社会的関心・領域のいずれにおいても広汎なものであった。主要な論点を挙げていくと、①女子高等教育の問題（女性に高等教育は必要か、女性にどういう教育を施すべきか）、②女性の職業・労働問題（女性に職業は必要か、女性の経済的自立について）、③夫婦間の法律的不平等の問題（法的行為に夫の許可が必要であることや姦通罪適用に関する男女間の非対称性）、④女性参政権（サフラジェットなどのイギリスの女性参政権運動に惹起されたもの）、⑤『青鞥』に代表される〈新しい女〉への賛否などがある。そしてこれらの諸問題の根底にあったのが女性を〈個人〉として認識することであった。

要するに以上の諸問題「女性の参政権、教育、職業など」は何れにしても、もつと根本の一問題を仮定した上に立つて居る。それはいはゆる婦人の個性独立といふことである。「中略」一疋の獣であらうが、一本の樹であらうが、大きな眼から見れば皆その個性を保たせてやりたい、まして人間にあつては、賢愚にかゝはらず個性は尊重すべき筈のものである、婦人の個性独立といふやうなことは、殆ど問題をなさない程自明な事柄である。それが永い間の伝襲で無視せられて来た。であるから婦人は、先づこの個性の独立から回復してかゝらねばならない。<sup>(19)</sup>

『霧』は、婦人問題として論じられた参政権や職業などの具体的問題ではなく、その根底にあつた〈個人〉としての女性の独立という問題を取り入れた作品だつたと言えよう。次の引用部も、家族や社会を離れて、〈個人〉として毅と向かい合おうする俊子の姿勢を描いている。

その瞬間、彼女の眼の前には親もなく、兄弟もなく、社会もなかつた。唯恋しい毅が唯一人渾身の愛を強ひるやうに厳然と突立つてゐるばかりであつた。／彼女は息塞まるほど強く乳房を抱き緊めながら暫らくの間喪心したやうにうつとりしてゐた。まるで毅の胸にでも抱き緊られてゐるやうな甘い快感が節々の末にまで肉の歎びを呼び醒めていつた。

(十一の二)

房子は毅の結婚相手候補で、毅をめぐつて俊子と三角関係を形成する人物である。ただし作中で直接姿を現す箇所は非常に少なく、毅を始めとする登場人物の口からその人物像や動静が語られることがほとんどである。その意味で物語の展開には大きく関わる人物ではない。房子は一時期毅と恋愛関係にあつたが、毅とは別に音楽家の恋人がいる

ことが露見して破局したという経緯がある。その経緯を家には伏せて房子は毅に結婚を申し込むが断られ、その上音楽家の子を妊娠するもその音楽家が行方をくらましてしまったために、房子は硫酸を飲んで自殺する。このように男性関係において「不行跡ふしだら」とされるなど、決して読者に好意的な印象を与えるようには描かれていない。しかし房子の自殺について毅は「今になつて考へてみると、あんな不節制ふしだらな女でも何処かに自覚した自意識の強い処があつた。人生と云ふものに対して何んかしら疑惑を持つてゐて、そのために態と現実的な放埒な生活のなかへ体を投げ出してゐるやう「な」処があつた」(十の六)と房子が「自覚」した女性であつたと述べる。自殺を試みるまでの房子は俊子に対する当て馬のような位置づけで、毅の口から否定的に語られることが多かつたことを考えるとここでの毅の房子に対する評価はとつてつけたような印象は否めない。しかし「自覚」という婦人問題におけるキーワードが使われていることは注目されてよいだろう。

また引用部後半で「甘い快感」「肉の歓び」と俊子の性的欲望に言及している点も重要である。これ以外にも沼津へ来た毅とつかの間の逢瀬を楽しんだあとに「此れ程接近しあつてゐながら、互に手さへ握らずに別れてしまつた事が急に物足りなく思はれて来た。一度人妻になつた俊子には、愛情の表白が単に言葉だけではどうしても満足されないのであつた」(十一の九)というように、近代では抑圧されがちな女性の性的欲望を描き込んでいる。

婦人問題に触れた箇所は他にも見られる。例えば女性の職業問題である。俊子は叔父との問答の中で、離婚後の再婚を否定し、北海道にいる従姉妹(叔父の娘)の治子のところへ行つて「学校の教員でもして、一生寂しく田舎で埋もれてしまふ心算つもり」(四の五)だという。治子は札幌で教員をしており、独身である。こうした治子の境遇は「彼女あれをあんな遠い北国の果へ追ひ遣つたのは全く私の罪なのだ。私が盛んな時分に早く嫁けてゞも置けば彼女だつて辛い思ひをしらずに済んだのだ」(四の五)と叔父が述べるように、経済的な理由によることが示唆されている(叔父は軍を退

役した後に事業を興すも失敗している)。治子が「独立、独立と手紙なぞぢや強いことも書いて寄越す」(四の五)と  
いうように、教員として働くことは当時では数少ない女性が自立する道筋の一つであった。ただし治子の外見が「俊  
子の眼にはピンひとつ挿してゐない治子の束髪や、光沢の失せた寂しい頬や、色気のない地味な着物などが何とも云  
へぬ傷ましさを覚えしめた」(十五の三)と描写されていたり、治子自身も札幌での暮らしを「彼地はそりやほんとう  
に寂しいのよ」(十五の五)とその寂しさを強調するなど、必ずしも肯定的な生き方としては描かれていない。こうし  
た経済的理由による消極的選択としての女教師像は、『女学世界』を分析した金井景子が指摘しており、特殊な設定で  
はなかったと考えられる<sup>20</sup>。

治子は物語終盤で俊子を北海道へ向かわせる理由付けになっていることを除けば、物語の展開に関わる人物ではな  
い。しかし先述したように当時の婦人問題において女性の経済的独立、すなわち職業問題も主要な論点となっていた  
ことを考え合わせれば、治子の存在はストーリーに大きく関わらないにせよ、女性の結婚以外の生き方を示している  
と言える。

他に婦人問題と関連することとして男女平等に貞操を要求すべきだと俊子は述べている。

仮よしまた若し私と毅さんとの間にそんな変な関係があるとしても、それを良人からいざこざ云はれる訳はないと  
思ひます。良人うちにはそんな資格は御座いません。自分は外へ出ちや勝手に賤しい芸者なんかと関係して歩いてゐ  
ながら、何うしてそんな立派な口がきけませう。余り人を馬鹿にしてゐるぢや御座いませんか。(六の四)

このように女性に貞操を要求するのであれば、男性も貞操を守るべきという主張も当時は見られた。俊子の台詞は



オリジナルなものではなく、婦人問題に関する言説を引用したものに過ぎない。

然るに日本の男子は既婚者でも、未婚者の如く、夜遊をする。如斯く其妻を侮辱しながら、然かも其妻に対してのみ貞操を要求する。日本の刑法は有夫姦を認めて、有婦姦を認めぬが、如斯きは、或意味に於て、この侮辱を公認して居るのではないか。<sup>(21)</sup>

ただし、俊子は最初からこうした婦人問題に見られる言説を主張するような人物であつたわけではない。例えば冒頭の「一旦あの人の処へ嫁かたういて見ればもう私の体じゃないんですもの」(一の四)という俊子の発言は、妻に夫への服従を求める旧来の道徳を踏まえたものである。その意味で俊子は元々は「新しい女」ではない。俊子の主張は毅に影響されたものである。

例えば毅が「結婚が何んだ。これほど莫迦げた虚偽が何処にある」と「独語のやうにぶつぶつ呟」くの聞いた俊子は「その言葉の調子はその刹那彼女の胸に蟠つてゐる考へを激しく衝き動かして、或共鳴を彼女に与へたやうに思はれたのであつた」(三の八)というように、結婚制度に対する疑問を毅の言葉によつて惹起される。これはもちろん、家の外で放蕩し、自分に飽きたからといって病気を口実に離婚を切り出すような仕打ちを受けた俊子からしたら、毅が心強い味方に見えたからであろう。また、夫との間で離婚話が持ち上がったことを俊子が告白すると、毅は「それに離婚といふことは貴女の考へてゐるやうに不名誉なものぢやありませんよ。つまらない男に奴隷のやうに踏み躪にじられてゐるよりもいくら立派だか知れませんが、自分を理解し尊重して呉れないやうな良人はいづれの意味から云つても貴女方の敵です」と述べて離婚に賛同する。それに体して俊子は「私も今度こそつくづく女といふものゝ位置を考



へてみました。同じ人間でありながらいつも不利益な位置にばかり立たされて、その上こんな恥かしめを受けなければならぬのかと思ひますと、ほんとに口惜しくつて耐らないんで御座います」(五の七)と返答するなど、毅の言葉に誘われて〈自覚〉していく過程が描かれている。しかし重要なのは、そうした共感のレベルを超えて、毅の思想に引きずられていることである。これは他にも例が見られる。先に掲げた「私は津崎の妻にはなりましたけど、心まであの人にすつかり遣つてしまつた訳では御座いません」と言う俊子は語り手によって「俊子は毅の口吻をすつかり出して、歇斯的<sup>ヒステリー</sup>に顔ぢうの筋肉を動かしながら云つた」と語られ、「毅の口吻」を模倣していることが強調される(六の五)。また前掲引用部(六の四)で俊子は、「俊子の胸には先刻<sup>さつき</sup>毅の吹き込んだ強い言葉が甦つて来たので、調子は自然と激越になつてきた」というように、毅の言葉から影響を受けている。それでは毅の言葉とはどのようなものか、確認していききたい。

毅は急に沈痛な顔色になつて黙り込んでしまつたが、やがて今度はひどく興奮して眼尻を細かく痙攣させながら<sup>たましひ</sup>霊魂と霊魂とが結びつく真の恋愛や、結婚は恋愛の墮落であることや、人生の背景となつてゐる暗い運命などといふやうな極めて高遠な議論を熱に浮かされてゐるやうな調子で次々と語りはじめた。そして結論はいづれの点からも人間は常に自由でなければならぬといふ格言めいた一言に落ちて行つた。(五の六)

このように毅は精神的な恋愛を強調し、結婚をその「墮落」と捉えている。特に注目されるのは「自由」を重要視していることで、毅が自己の思想を述べる他の箇所でも「自由」について言及している。

親なんて云ふものには到底僕達の心持ちは分りやしないんです。又分つた時に何うにもならないんですからねえ。「。僕達は僕達で自分の道を歩いて行くより外には仕様がなほんたういんです。なにも一生の幸福や、真箇の自分を犠牲にしてまで妥協して行く必要はありません。それに人間の一生なんて云つたつて、長いやうで実に短いもんですからねえ、僕はもう少し自由に、ほんとの自分に近い生活をして行き度いと思ふんです。

(十一の七)

自由になることが「ほんとの自分に近い生活」に必要であるという。ここでは「自分の道を歩いて行くより外には仕様がなほんたうい」と、親とのしがらみを断ち切つて「個人」として生きていくことが強調される。

道德が何んです社会の制裁がなんです。皆人間が人間自身の自由を束縛するために作つた縛ぢやありませんか。僕達はそんなものに縛られてゐる必要はない。もつともつと自由でなければなら「ない」んです／「中略」／僕達の前には自由の外には何んにもない筈なんです。人生は即ち快樂と幸福の追窮に過ぎない。それが出来ない者は一種の弱者なんです。「中略」僕達には今日のほかにはもう明日もなければ昨日もない。今日といふ日がほんとうの生命なんです。

(十一の八)

いずれも「自由」を強調している点で共通している。毅のこうした思想は明治後半期の青年たちに大きな影響を与えた高山樗牛の美的生活論、より正確には美的生活論を受けてニーチェと結びつけた登張竹風『美的生活論とニイチエ』(『帝国文学』明治三四・九)を想起させる。竹風は「高山君は自由の語を放たざりき。然れども、その所謂本能は自由の本能なることは、また疑を容るゝを要せざるなり」とニーチェを援用しながら樗牛の説く「本能の満足」と

「自由」を結びつけていた。毅の思想は幹彦独自の思想を代弁しているというよりは、こうした既存の思想の間接的な影響下にあった当時の青年の典型パターンの一つだと言えるのではないか。ただし毅の求める自由はかなり極端であり、反社会的な側面を持っている。ここで述べられているのはいわば精神の自由だが、次の引用部でも、会社員の生活に縛られない自由を述べている。

毅は途々今夜赤坂のさる料理屋で同窓の法学士連の会があつて、出席するにはしてみたがちつとも面白くないので膳が出ると間もなく脱けて帰つてきたことを取留めもなく話した。そして問はず語りにさる大会社から就職口のかかつて来たことを云ひ出して、そんな愚劣な一会社員の生活に縛られるより若い間だけ欧羅巴へ行つて思ふ存分な生活をやつてみたいといふやうなことをいつにない浮々した調子で俊子に話して聞かせた。(五の四)

毅について整理すると、毅は杉浦家という「資産家の次男」(一の六)であり、この引用部でも「赤坂のさる料理屋で同窓の法学士連の会」があつたり、「さる大会社から就職口のかかつて来た」が「そんな愚劣な一会社員の生活に縛られるより若い間だけ欧羅巴へ行つて思ふ存分な生活をやつてみたい」と述べたりしていることから、学歴はあるものの現在は働いておらず、いわゆる高等遊民である。<sup>22</sup> 毅が抽象的な思想を「熱に浮かされてあるやうな調子」で語る点に、病的な調子があると先に指摘したが、前掲引用部(五の六)で「ひどく興奮して眼尻を細かく痙攣させながら」や、俊子の母親から姦通疑惑で詰られている場面で「毅は妙に歇斯的<sup>ひすてりっく</sup>な陰鬱な眼つきになりながら」(八の六)、「唯時々陰鬱な眼で母親の顔を見据ゑるだけで」、「その顔は恐ろしい絶望のために蒼く拘攣つてゐた」(八の七)というようにヒステリーや「陰鬱な眼」といった病的な様子が語られる。

こうした極度の自由を求め、社会の束縛を嫌う思想を持ち、しかもそれが病的な様子で語られる毅の人物像は、健康で模範的な青年ではない。こうした毅の人物像は藤村操に象徴されるような「煩悶青年」を想起させるが、結婚という社会システムを否定し、「人生は即ち快樂と幸福の追求に過ぎない」と述べるあたりは、むしろ徳富蘇峰の言う「耽溺青年」に近いように思われる。「耽溺青年」は「一切を否定し、一切を無視」するため「煩悶青年」よりも国家にとつて有害な存在だと蘇峰は指摘する。

彼等の哲学を、一言にして約すれば、所謂刹那主義のみ。人生幾許そ、譬へは朝露の如し。此の瞬間に於て、鹿爪らしき理窟を唱へ、苦虫を咬み潰したる様なる顔色を做し、自から拘ひたる繩に、自から縛せられんよりも。寧ろ面白く、可笑しく、楽しく、現在を送るに若んやとは、是れ彼等の信条也。<sup>(23)</sup>

このように考えていくと毅の人物像は当時の青年の諸類型の一つであつたと言えるのではないか。「煩悶青年」含め、毅のような青年は社会的に推奨された存在ではなかったが、『霧』においては毅の自由を求める思想は、夫や親との関係に縛られる俊子を解放する役割を果たしている。自由を求めて〈家〉を捨てた二人の姿は、〈家〉に縛られている読者、特に女性読者にとつては魅力的なものに映ったかもしれない。旧来の道徳が強制していた夫への服従ではなく、〈個人〉として自覚し毅と駆け落ちすることを選ぶというのは、現実では実行できないことを作品を通じて追体験できるからである。

## 五

本稿では長田幹彦の通俗小説家としての側面に注目し、最初の新聞連載小説『霧』について検討した。作品成立の過程を整理し、本作が発表時に読者から高い人気を得ていたことや、作品の着想を得た契機として北原白秋と幹彦自身の姦通事件が可能性として考えられることを指摘した。その上で作品を分析し、本作が同時代に流行していた婦人問題の言説を取り入れ、また毅についても高等遊民で病的な様子など、時代性を帯びた人物造形であることを明らかにした。

最後に、冒頭の問いに戻って本作が明治期家庭小説から大正期通俗小説へという通俗小説の歴史においてどのように位置づけられるかを述べておきたい。

まず本作は俊子という既婚女性を主人公とし、主に俊子に焦点化した語りによって物語が展開する。さらにその物語の主要な筋も、夫の離婚問題、親を始めとする家族との関係、幼なじみ男性との恋愛など、既婚女性のプライベートな領域に限定されている点で家庭小説と共通した枠組みを持っている。俊子と毅の姦通的な関係は新聞小説で扱うには危険な題材ではあるが、夫の横暴と毅との肉体関係を描かないことで姦通というテーマに付随する不健全さを回避している。ここまでは家庭小説の特徴と合致するが、本作はそこに婦人問題という社会的な流行を取り入れることで、作品に社会性を導入しよう<sup>24</sup>と試みたのではない。瀬沼茂樹は家庭小説と大正期通俗小説との違いとして社会性の有無を指摘しているが、その意味で本作は従来の家庭小説から半歩踏み出した作品であったと位置づけられよう。

ただしこうした婦人問題の扱いは、女性解放思想を幹彦が鼓吹しようとしたというよりは、社会の動向を敏感にキャッチして読者を引きつける要素として使われているだけに思われる。純文学と通俗小説の違いとして、純文学は



作家の書きたいものを書き、通俗小説は読者受けを狙って書くことが挙げられるが、まさに『霧』はそうした社会性を導入することで読者の興味を引こうとした試みと言えるのではないか。

幹彦と言えば『滯』や『零落』、あるいは祇園ものなど、感傷的な作風が特徴とされてきた。『霧』もそうした特徴は受け継がれているが、しかし一方で同時代の社会的動向を取り入れている点で従来の幹彦の作家像に収まらない作品だと言えよう。こうした社会性を作品に導入し、読者の興味を牽引していく手法は、『霧』以降の幹彦の長編小説にも受け継がれていく。長篇のストーリーを紡いでいくこと、そこに社会の動向を描き入れることを実践した点において本作は作家・幹彦にとって新たな挑戦であり、そして後年の通俗小説家への道を予告するものであったと位置づけられるのである。

#### 注

(1) 本稿における通俗小説とは、「現代を舞台にし、多数の読者に読まれることを想定した非芸術的作品のうち、恋愛や家庭問題をとりあつかったもの」とし、家庭小説も含むものとする。久米正雄や菊池寛に代表される狭義の通俗小説は、大正期通俗小説と呼ぶ。

(2) 「長田幹彦の位置——大正文学を長篇小説の時代として（注釈）する——」（『日本近代文学』二〇〇三・一〇）

(3) 藤井淑禎「大衆文学の成立——通俗小説の動向を中心として」（筒井清忠編『大正史講義【文化篇】』二〇二二・八 筑摩書房）

(4) 山本芳明「徳田秋声の通俗小説論をめぐって」（『徳田秋声全集』月報三八、二〇〇四・一 八木書店）

(5) この「大好評忽再版」は事実だと考えられる。九十九書房版の単行本『霧』の再版は大正三年五月二〇日となっている（筆者架蔵本にて確認）。



- (6) 「社会小説『闇と光』に就て」(『東京朝日新聞』大正九・六・二〇)
- (7) 「家庭小説研究」(山本三生編『日本文学講座一四卷大衆文学篇』昭和八・三 改造社)
- (8) 『本歳の文壇 創作界を顧みて』(『時事新報』大正二・一二・一三、一四、引用部は一四日掲載)
- (9) 無署名「新刊批評」(『読売新聞』大正三・五・二六)。引用文中の■は判読不能箇所を示す。
- (10) 藪下義雄『評伝北原白秋』(昭和四八・六 玉川大学出版部)
- (11) 『白秋全集』三九(一九八八・四 岩波書店) 以下の白秋書簡の引用については同書による。
- (12) 前掲『評伝北原白秋』
- (13) 『私の読んだ創作 下』(『時事新報』大正三・六・七、八、引用部は八日掲載)
- (14) 前掲『青春時代』
- (15) 前掲『青春時代』
- (16) 前掲『青春時代』
- (17) 実際に幹彦が告訴されそうだったのかわからないが、当時の刑法では「前項ノ罪〔姦通罪〕ハ本夫ノ告訴ヲ待テ之ヲ論ス」というように、姦通罪で捕まるためには姦通された夫の告訴が必要だった。これは言い換えれば、姦通した男女を罪人とするかどうかは、夫の意志に委ねられていたといっている。実際、明治四〇年八月から十一月にかけて海軍中将伊東義五郎の姦通事件が『東京朝日新聞』で報道されていた。最初は藤井陽一という男が伊東を恐喝したという事件だったのだが、恐喝の内容が伊東と藤井の妻・げんが姦通をしているというものだった。伊東とげんは藤井から告訴され、伊東は海軍を免職となった。このように告訴する権利を逆手にとつての恐喝は実際にあった。
- (18) 『講談倶楽部』の編集者であった岡田貞三郎は幹彦について次のように回想している(『大衆文学夜話』昭和四六・二 青蛙房)。  
あの人、座談がお上手でしてね。聞いているこちらが、時間のたつのを忘れるようなおもしろい話が、つぎからつぎと、お口をついて出る。もっとも、そのなかには眉唾もの話題は少なくはないんで、金持ちの未亡人に誘惑されそなたご自

分の体験談など、聞いていて、へええ、世の中にはそんなこともあるものかと、思わず唸ってしまいましたが、なに、全部  
つくり話で、いつかご自分が新聞に書かれた連載小説の荒筋だったことを、あとで知りました。

(19) 島村抱月「個性独立が根本問題」『太陽』大正二・六

(20) 「自画像のレッスン——『女学世界』の投稿記事を中心に」(小森陽一他編『メディア・表象・イデオロギー』一九九七・五  
小沢書店)

(21) 永井柳太郎「新しき女」を論ず」『中央公論』大正二・七

(22) 資産家の次男である高等遊民といえ、同じ『東京朝日新聞』に連載された夏目漱石『それから』(明治四二・六・二七〜  
一〇・一四)の長井代助が思い出される。さらに毅と代助では、人妻と恋愛関係に至る物語という点でも共通している。

(23) 『大正の青年と帝国の前途』(大正五・一一 民友社)

(24) 瀬沼茂樹「家庭小説の展開」『文学』一九五七・一一

(25) 前掲加藤武雄「家庭小説研究」

〔付記〕 引用に際して、漢字は通行の字体に改め、ルビは適宜省略した。『霧』の本文は初出によった。引用文中の  
「」は改行を示し、傍線は浅井が付したものである。また「」内は浅井による注記である。本稿は JSPS 科研  
費(課題番号 22K13053)の助成を受けた研究成果である。

(甲子園大学助教)